

— 分科会 —

中 学 校



(財) 日本学校体育研究連合会

第5分科会

長野市立篠ノ井東中学校

第6分科会

長野市立柳町中学校

第7分科会

信州大学教育学部

附属長野中学校

第 5 分 科 会

研究主題

仲間とかかわりながら、「わかった自分」「できた自分」を実感する体育学習

しのの い ひがし
長野市立篠ノ井 東 中学校

日 程

9:00	9:30	10:20	10:30	11:20	12:00	13:00	13:15	14:45	15:00
受付 移動	1 時間目 「器械運動」 於: 励志館	移 動	2 時間目 「球技」 於: 桐輝館	移 動	昼 食	開 会 行 事	研究会 ○研究発表 ○研究協議 ・器械運動について ・球技について ○指導 講評	閉 会 行 事	

公開授業内容

第2 学年 器械運動「マット運動」 体育館

第1 学年 球技「アウトナンバーバスケットボール」 (ゴール型) 体育館

学校所在地



交通機関

- 最寄駅
JR・しのの鉄道「篠ノ井駅」下車 徒歩 25 分
- 経 路
長野駅
↓ 所要時間 13 分
JR・しのの鉄道「篠ノ井駅」 下車
徒歩 25 分

※シャトルバス (有料) 長野駅東口より

学 校 概 要

学校名	長野市立篠ノ井東中学校		
校長名	松本 道明		
学級数	15学級	生徒数	464名
所在地	〒380-8008 長野市篠ノ井小森 840 番地		
連絡先	TEL 026-292-0135 FAX 026-292-0637		

【学校紹介】

学校教育目標 **人にやさしさ 自分につよさ**

【概 要】

本校は昭和22年に開校した篠ノ井町立通明中学校を前身とする50年近い伝統のある中学校である。長野市南部に位置し、全校生徒数は464名である。1998年に開催された長野オリンピック(冬季五輪)の開閉式場であるオリンピックスタジアムの近くに位置する。

【願う生徒の姿】

○みずから学ぶ

- ・集中して学ぶ生徒
- ・進んで発言し、自主的に学習する生徒
- ・お互いの考えを出し合い、認め合える生徒

○ともに創る

- ・自分の生き方を振り返ることができる生徒
- ・涙を流せる生徒・コミュニケーション力のある生徒
- ・仲間と協力したり良きライバルとして競え合える生徒
- ・感謝の心を持つ生徒

○たくましく生きる

- ・負けない心をもつ生徒 ・挑戦する心をもつ生徒
- ・自ら健康管理ができる生徒
- ・社会生活のルールを守れる生徒
- ・選択する力や判断する力をもった生徒

【学校経営の重点】

- 1 確かな学力を身につける教科学習
- 2 自分、仲間を大切に作る人間関係づくり
- 3 自治の校風を育む生徒会活動
- 4 人権感覚を磨く人権同和教育
- 5 予見・予防的な体制の充実

【学校のコンセプト】

- 生徒** 当たり前のことが当たり前に見える生徒
- 職員** 和を大切に 笑顔で本音（悩み、弱音、愚痴など）を出し合い、前向きに子供や教育を語り、実践する職員集団
- 学校** 生徒も職員も、保護者も来なくなる学校

【沿革】

- 昭和22年 4月 篠ノ井町立通明中学校として開校
校地 篠ノ井御幣川280番地
- 昭和34年 5月 篠ノ井町・塩崎村が合併し篠ノ井市誕生
篠ノ井市立通明中学校となる
- 昭和41年 4月 篠ノ井市立東中学校開校
校地 篠ノ井小森840番地(現在地)
- 昭和41年10月 長野市との合併により長野市立篠ノ井東中学校と校名変更

【校章】

大正11年通明小学校で校章として制定された桐のマークは、学区内にある布施神社の紋所「五三の桐」をもとにしたものであった。昭和22年に発足した通中学校も小学校と同じく桐のマークを校章とし、現在にいたる。

桐の花をデザインした校章



1. 研究主題

仲間とかかわりながら、「わかった自分」「できた自分」を実感する体育学習

2. 主題設定の理由

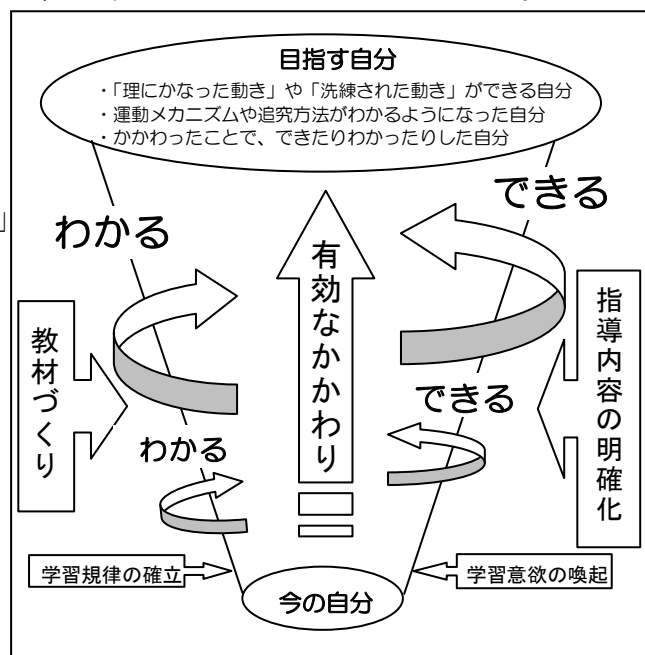
本校では、学校教育目標「人にやさしさ・自分につよさ」の具現のために、全校研究テーマを「考える力を高める授業の創造」とし、教科の学習や総合的な学習を通して、生徒が必要感に支えられながら追究したり、友を尊重しながら自らの見方・考え方を再構築したりするとともに、自らの学びを振り返り新たな課題を見つけ出す「考える力」を高めることを重点に研究を進めている。そして各教科で研究実践をしていく中からは、「①学習へのねがいを高める支援の工夫 ②友の見方・考え方と関わらせながら追究するための授業展開の工夫 ③自らの学びを振り返り、次の課題を発見できる自己評価の工夫」といった視点で授業改善をしていくことが大切ではないかということが分かってきた。

保健体育科では、全校研究テーマを受けて「教材づくり・生徒同士のかかわり・成果が実感できる自己評価の工夫」を教科研究の軸に据えて進めてきたが、次のような課題が残されている。

- 自分に合っていない課題を据えてしまい、追究していても「できそうだ。」「やってみたい。」という意欲が高まっていかない。
- アドバイス活動を意図的に仕組んだり、アドバイス活動の必要感をもたせたり、仕方を細かく指導しないと、友と関わって学習効果をあげることが上手にできない生徒が多い。

この課題が残されている理由には、生徒が「目指す自分」になるための学習過程をイメージする時に出発点である「今の自分」の技能を正しく理解するための支援や的確な課題追究が展開しやすい教材づくりが充分でなかったこと、技能獲得のポイントがわかったり技能を獲得できたりするために有効な生徒同士のかかわりについての指導が充分でなかったという教師側の反省がある。

本年度長野市で行われる第50回全国学校体育研究大会長野大会では、新学習指導要領の改善の基本方針を受け「すべての子どもが夢中になり、健康で豊かなスポーツライフの実現をめざす体育学習の創造」という研究主題を据えている。そして、「夢中になる」ということを『わかる』『できる』『かかわる』楽しさを味わう学習を通して指導内容を身につけ、運動の特性や魅力に十分に触れている姿である。」と定義している。これをふまえ本校の体育授業において「わかる」「できる」「かかわる」楽しさを味わうとは、どのような姿なのか考えた。わかる楽しさとは「運動のメカニズムや追究方法がわかるようになった時」に実感できるもの、できる楽しさとは「理にかなった動きや洗練された動きができるようになった時」に実感できるもの、そしてかかわる楽しさとは、自分がかかわった結果として仲間がわかったりできたりしたときに実感するも



本校の目指す体育学習のイメージ図

のであると思われる。そして、健康で豊かなスポーツライフの実現のためには、単にその時に「わかった」「できた」という経験のレベルではなく、わからなくて楽しくなかった自分から「わかって楽しくなってきた自分」への進歩や、できなくてつまらなかった自分から「できるようになって楽しめるようになった自分」への成長を実感することが大切であると考えた。

そこで、本研究では今までの研究で残されている課題をふまえ、①「今の自分」と「目指す自分」をつなぐ教材づくり ②「わかる」「できる」ための有効なかかわりの二つを研究の柱とした。教材づくりでは、生徒にとって「わかった」「できた」楽しさがあり、目指す自分への成長が実感できるために、指導内容を明確にした教材開発と単元を計画していきたい。生徒相互の有効なかかわりの指導では、友の「わかった」を支えるかかわりのあり方と「できる」ための補助や有効なアドバイス活動について、実践を積み重ねていきたいと考えている。

3. 研究の仮説

<このような生徒に>

- 全体的には運動を楽しむことに対して前向きな生徒が多く、技能向上への欲求もあり、苦手でも仲間と協力して学習に取り組める生徒が多い。
- 学習集団の運動経験や技能差及び学習内容の共通理解を図った上で場やルール工夫を提示すると、運動の苦手な生徒の気持ちに配慮しながら学習内容の習得を図ろうとする心遣いができる生徒が多い。
- 友との学び合いによって課題を明確にしたり、資料を自主的に活用して解決していこうとしたりすることが上手にできない生徒が多い。
- 示範や一斉指導及び直接指導を受けて追究することはできるが、自己評価が適切にできないことが多く、また友達に評価を求めようとするのが少ないため、技能向上の効率が悪い。



<このような手だてをすれば> …「わかった自分」「できた自分」を実感するために

◇「今の自分」と「目指す自分」をつなぐ「わかって、できる」教材づくり

- ・系統的段階的な学習が展開されるように、学区内小学校と連携してカリキュラム作りをし、生徒の学習準備状況（学習経験・既習事項・技能）をふまえて指導内容を明確化する。
- ・技術的な課題に気づく（判断力）ことができやすかったり指導内容が習得しやすかったりするように、運動（用具やルールなど）や教具や場を簡易化して教材づくりをする。

◇「わかる」「できる」ための有効なかかわりに対する指導

- ・つまずきや成功の原因を生徒が客観的にとらえ、アドバイス活動を活発化させる手だてとなり得る資料提示や教材教具を工夫（視聴覚機器・視聴覚教材の活用を含む）する。
- ・友のよさに気づくことができる学習活動や学習形態を工夫する。
- ・指導内容に対して声がけできるような「チェックカード（仮称）」の導入や、自己評価をより適確に行うための「アドバイスカード（仮称）」を使用する。
- ・主運動（メインゲーム等）と補強運動（タスクゲームや下位教材等）の関連性の指導と、その活動を通して技能ポイントとアドバイスの視点と目指す姿がつかめる工夫をする。
- ・生徒の「できた経験から得られたコツ」を広め、声がけのポイントを整理・活用させる。
- ・直接的な補助や称賛の声がけの仕方を指導する。



<こうなるだろう>

- * つまずきに対して、自ら友と協力して原因を探り、より自分に合った課題をもつことができる。
- * 成功に対して、理由を加えながら伝え合うことができ、喜びを深めることができる。
- * 「わかった喜び」「できた喜び」の理由として「〇〇さんのおかげで」というものが出てくる。
- * 自己評価が、感覚的なものから技能的な成果と課題にシフトし、技能向上の効率が上がる。
- * 運動中の声かけが、場あたりのなものから友にとって有益なものになってくる。
- * 単元のまとめでは、「わからなくてつまらなかったが、わかって楽しくなった。」とか「☆☆ができるようになって楽しくなった」という成長した自分を実感している振り返りのコメントが出てくる。

4. 研究の重点（公開授業にかかわって）

(1) 「今の自分」と「目指す自分」をつなぐ「わかって、できる」教材づくり

本校では、学習準備状況（学習経験・既習事項・技能）をつかみ、学習指導要領に示されている指導内容をふまえて教材化することを大切に考えている。特に一学年の各単元の計画を立てる際には、小学校での学習経験のアンケートをとって、学習準備状況をつかむことにしている。

(2) 「わかる」「できる」ための有効なかかわりとその指導

本校では、「わかる」「できる」「かかわる」楽しさの関係を、「わかる楽しさのためにかかわりが必要」「できる楽しさのためにかかわりが必要」「そのためのかかわりができることが楽しい」ととらえている。

以上の点をふまえて、今回の学習の計画や授業をする際に気をつけていることは、以下の点である。

【1学年：バスケットボール】

- ・ 小学校の学習で、ソフトバレーボールを使った3対2（オフェンス有利）のアウトナンバーバスケットボールを経験してきている生徒なので、より攻撃に有効なオープンスペースに意図的に走り込んだり、スペースに走り込んだ味方を見つけてパスを出したり、自分へのマークが甘いと思ったときにはシュートをしようとしたりする判断力を身につけられる学習過程やゲームの工夫を行う。
- ・ その技能を発揮できるための練習やタスクゲームの工夫、チーム内での支援が活発化するための学習カード類の工夫を行う。

【2学年：器械運動】

- ・ 一学年の学習で、基本的な単技の習得を目指し教師が示した合格基準に向かってペアでの追究をした経験をもつ生徒なので、生徒が視聴覚教材と視聴覚機器を有効に活用して、自分の課題をよりの確に把握できるような仕組みをつくり、課題解決のための練習方法や場の工夫を生徒が見つけ出せる力をつける支援の工夫を行う。また、補強運動ではリズムに合わせて技を行う活動を取り入れ、技の精度を高めることも行う。

5. 研究の内容と実践事例

(1)「今の自分」と「目指す自分」をつなぐ「わかって、できる」教材づくり

①生徒の学習準備状況をとらえ、生徒に合わせて運動を簡易化した教材づくり

本校では、特に一学年の各単元の計画を立てる際には、小学校での学習経験のアンケートをとって、学習準備状況（学習経験・既習事項・技能）をつかむことにしている。そして、計画や授業をする際に気をつけていることは以下の二点である。

○学習とは、すべての生徒のために存在するので、小学校の時にその運動に対するマイナス意識がある生徒にとっても学習が成立するように運動を工夫するのだということを理解させてから授業を行う。

○技術的な課題に気づくことができやすいように、運動（用具やルールなど）を簡易なものにして教材づくりをする。

《事例1》「シュートを入れたいけど、シュートチャンスに恵まれない。」「積極的にプレーに関わりたいけど、動きが分からない。」という生徒が、仲間とともにパスをしながらシュートを打つ喜びを味わったり、パスをもらうために自分や仲間が動けるようになることの楽しさを味わったりしてプレーや楽しみ方の幅を広げることができたバスケットボール。

～H21年度の1年生「3on2 バスケットボール」より～

○種目 3on2 バスケットボール（ハーフコートアウトナンバーゲーム）

- ・攻撃側にアウトナンバーを一人作った3対2のゲーム。パスを出す側はフリーになっている者を見つけ、パスをもらう側もオープンスペースに走りこみ、シュートチャンスに恵まなかった生徒もチャンスの場面を理解しやすくなるので、積極的にプレーに関わりパスをつなぐ楽しさや、シュート&ゴールの喜びを味わうことができる。
- ・攻撃側であるときと守備側であるときを明確にしているので、攻撃時の動き方に学習の共通課題をもちやすく、生徒同士でゲームを分析したり、課題を指摘しあったりして、ボールをもっていない人の動きによってプレーの幅が広がるという学習ができる。

○ルールと用具（ボール）

- ・ドリブルなし。
- ・レクリエーションバレーボール。空気を若干抜き、バレーボール特有の反発力を弱めることによって、リングやバックボードからの跳ね返りが、よりバスケットボールに近い状態にする。
 - *ドリブルを禁止したゲームなので、ボールをもっていない人がいかにももらえる場所に動けるかが大切であるが、その動きに合わせた速いパスが要求される。このボールにすることで、キャッチング技能が高くない生徒であっても恐怖心なく積極的にボールをキャッチしようとする事ができる。
 - *小学校より30cmほど高くなっているゴールリングに、腕力の少ない生徒であってもボールを届かせることができるため、積極的にシュートをねらうことができる。

○授業の実際

キャッチング技能が低く、アンケートでは「パスがまわってこないからバスケットボールは嫌い」と言っていたA生。ソフトバレーボールを使用するという教師の提案に対して、周囲の生徒の戸惑いとは逆に安心したような表情を浮かべていた。パスゲームをしていても明るい表

情で取り組んでいた。当初はドッジボールで使われるキャッチングしか試みることができず、キャッチミスをすることも多かったA生であったが、ボールへの恐怖心が薄らいできたのか、両方の手のひらを使ってキャッチをすることができるようになり、他の生徒と同じ様なキャッチからスローへの素早い動きもできるようになり、単元中盤のゲームの中では、シュートも試みることができるようになった。

また、戦術学習のめあてのもち方のキーワードとして、①ボールを持ったら何をするの？ ②ボールを持っていないとき何をするの？ を提示しチームや個人のめあてを戦術面に絞ったところ、

「ボールを持ったら素早く周りを見て、パスできそうな人を見つける。」

「ボールを持っていないときは、自分にディフェンスのマークがついているかどうかを見て、ついていなかったらパスをもらえるように呼ぶ。」

というように、どのように判断すればボールにかかわることができるかを学んでいた。また、共通課題が「裏をとる動きをしよう」だった授業では、「今日のBチームはすごく好調でした。まず、今までできていなかった素早いパスができるようになりました!!

声掛けをしながらパスをしていったので、ミスも減りました。また、一部の人ががむしゃらに打っていたシュートも減り、全員が確実に打てました。その結果、私達は2勝することができました。いつもはプレーにあまり関わられていなかった人も、積極的に動いてくれたので、とても嬉しかったです。先生の言った通り、工夫したり裏をかいだパスや動きをしたりしてみたら、とってもとっても楽しかった。今度は何をやってみようかな〜と楽しみにしています。でも、私達のチームには、まだ裏をとる動きがあまりできていない人もいますので、チーム内でしっかりミーティングをして、全員ができるようになるといいです。」という感想を書いていた。



【考察】

クラスの 1/3 の生徒がバスケットボールに対してマイナスイメージをもってスタートした単元だった。しかし、その理由であった「パスをもらいたいけど、もらえないことがつまらない。」に対して、ボールの工夫をしたり、アウトナンバーゲームにして動きの認知的学習を仕組んだことにより、A生のように変容をとげた生徒が多く見られた。戦術的な学習が未熟な状態の生徒が、イーブンナンバーゲーム等の高度なゲームをすると、個人技能の差によってその運動の楽しさを味わえるかどうかが決まってしまうだろうと思われる。このことから、生徒の学習準備状況を丁寧にとらえ、つけたい力を明確にして教材づくりをすることが大切であることがわかった。さらに今後は、中学三年間の学習内容をより明確にした上で、各学年における教材づくりをしていきたい。

②指導内容を明確にした単元計画と運動の工夫

研究を進める過程で、用具やルール工夫をただけでは指導内容を身につけさせるには不十分であることがわかってきた。そこで、その一時間の指導内容をより明確にし、そのための場の工夫を加えて授業してみた。

《事例2》パスをもらうことが可能な位置が分かってもらえるようになってきたが、シュートをするために有効な場所ではないことが多かった。そこで、ゴール下にシュートエリアを設けた。そこに走り込んでもらうことを意識し、キャッチボイス&ターゲットハンド、観察者からの判断を支える声がけによって、シュートを打てる位置に動いてパスをもらい、シュートを打つことができるようになった授業。

～H22年度の1年生「アウトナンバーバスケットボール」より～

○種目 3on2 バスケットボール（ハーフコートアウトナンバーゲーム）

- ・攻撃側にアウトナンバーを一人作った3対2のゲーム。事例1と同じ。

○ルールと用具

- ・ドリブルなし
- ・5号球の合成皮革ボールを使用。
 - ＊6号球に比べて小さく軽くソフトタッチ。

小さくて軽いため、パスやキャッチの技能が高くない生徒でも扱いやすい。また、ソフトタッチのため恐怖心が軽減され、より積極的なプレーが期待できる。

- ＊合成皮革ボールのために、バックボードの跳ね返りも自分の感覚に近くシュートが入りやすい。

○授業の実際

あまり運動が得意でなく、アンケートでも「バスケットボールはどちらかといえば嫌い」と答えていたB生。単元の初めには、ゲームの中で自分ではフリーになっていると思っているのになかなかパスが回ってこなかったと不満を学習カードに書いたことがあった。そこで、次時に空間にあるパスラインを視覚でとらえられるようにゴムを使って行った認知学習を行ったところ、パスがもらえる位置が分かり適切な位置に動けるようになってきた。また、ボールに触る機会も増えたことで積極的



にゲームを楽しもうとする姿も出てきた。しかし、ボールを受けるとディフェンスに守られ、思うようにプレーができないという壁にぶつかった。

次の時間に、ターゲットハンド&キャッチボイスの重要性についての学習を通して、仲間と連携してオープンスペースに動いてボールをもらうことが少しできるようになると、シュートを打ちたいとの願いが出てきた。しかし、ボールを持った時の判断が遅く、シュートチャンスはあっても実際のシュートに結びつかないことや、シュートチャンスとなる場所でパスをもらえないという課題があった。

そこで、判断が遅くパスやシュートにむすびつかない状況を、チームで補っていかうとかかわり方の提案をした。シュートチャンスには「シュート！」より有利な位置に味方がいたら「パス！」と、見ているチームメイトや一緒にプレーしている仲間からの声掛けも活発になってきた。そして、更にどの位置に走り込んでボールをもらおうと、シュートに結びつくかという判断を支える手だてとして、ゴール付近の比較的シュートが入りやすいエリアをラインテープで囲

い『シュートエリア』とした。すると、B生も含めターゲットハンド&キャッチボイスを出してシュートエリアに走り込んでパスをもらい、周りの「シュート」という声に支えられて自信を持ってシュートを打つ姿が見られた。

【考察】

その一時間の指導内容を明確にし、技術指導をしたり教具や場の工夫によって認知的な学習を効果的に行ったりすることが、生徒の課題に対して段階的に指導を行う上で有効であることがわかった。また、一朝一夕で向上するのが難しい瞬時の的確な判断は、有効な関わり方の指導を行い、チームメイトや周りの仲間の支えで繰り返し学習させることでカバーできることが分かった。

(2)「わかる」「できる」ための有効なかかわりとその指導

①「コツ」の共有化をはかる教師の支援

《事例3》アンダーハンドパスの技能ポイントを自分達で見つけ出した学習経験を想起したり、意思表示の声を出して積極的にパスに関わることができるようになるためにゲーム分析の一つとして意思表示の声を記録したりしながらゲームをすることで、アドバイスが活発に行われたバレーボール

～「ソフトバレーボール」H19年度の1年生より～

○種目：ソフトバレーボール（レクリエーションバレーボールを使用）

- ・自分達のコート上では何回パスをつないでも良いというルールにしたゲーム。自らボールをとりに行くとか、仲間に拾ってもらおうという意思表示の声に支えられた判断により、積極的にレシーブ・パス・攻撃に関わろうとすることで、自分達のコート上にボールを落とさずパスをつなぐ楽しさをチームで味わうことができる運動である。
- ・ネット型（攻守分離型）なので、自分達のコート上においてパスをつなぐことだけに課題をしばりやすく、自分がボールをプレーするときと、仲間がプレーするときの二つの場面においてのみのチームの共通課題が設定しやすい。生徒同士で、プレーを評価しあったり、課題を指摘しあったりして、課題解決学習ができる。

○授業の実際

ボールをはじく技能を用いて思い通りにボールコントロールすることが苦手で、ボールにかかわろうとする姿勢が消極的だったC生。単元前半に行った下位教材である「円陣パスゲーム」において、回数が増えているグループの様子を全員で観察したり、ボールコントロールするために工夫した「コツ」を話してもらって共有化したりする学習をしたところ、同じチームのD生から

「Cさんは、腕を振り上げすぎているから自

分よりも後ろにとんでいってしまうんだよ。1班の人達が言っていたみたいに上に持ち上げるようにしてみたらいいんじゃない？」

というアドバイスを受けると、腕の振り幅が狭くなり、自分の上の方にボールを上げることができるようになった。そのことにより、チームのパスがつながるようになり、C生の表情は明



るくなった。すると、自分でレシーブをするときは「OK!」という意思表示の声が出るようになった。

単元中盤以降のメインゲームでは、「自分が拾うよ」という意思表示の声「ハイ!」「OK!」, 「任せたよ」という意思表示の声「〇〇さん! (名前を呼ぶ)」「頼む!」「前!」「後ろ!」を出したかコート外にいる生徒がチェックをし、試合結果と照らし合わせて分析する学習をした。意思表示の声の量と上手くいったプレーの回数が比例していることに気づいた生徒は、積極的に意思表示の声を出すようになり、結果として積極的にプレーするようになった。また、コート外からも「〇〇さん! 声出して!!」「OK の声、出てないよ!!」などのアドバイスの声かけられるようになった。

【考察】

アンダーハンドパスの技能ポイントやゲーム分析で何を見ればよいのかを明確にしておいたことにより、何について観察し何をアドバイスするのかがわかったため、積極的にアドバイスの声をかけることができたのだろうと思われる。また、チーム内で常にコート外にいる生徒がいる形にし、試合ごとに客観的に分析させたりパスの技能ポイントという技能評価の視点でプレーを見てアドバイスするようにさせたりしたことが、自分の技能を客観的な視点と自分の身体的な感覚の両面からとらえることになり、技能的課題をよりの確にとらえ意欲的に学習することにつながったと考えられる。

《事例4》既習のステップを組み合わせながら、リズムに乗って楽しく踊ることができる構成をグループで考えてきた生徒が、他のグループのダンスを踊る体験を通してステップの変化の違いを感じ取った時間。構成的にはサイドステップを効果的に組み込むことが、体幹の揺れを起こし、楽しさの増幅につながっていることに気づいたリズムダンスの学習 ～「現代的なリズムのダンス」H23年度の2年生より～

○単元名「KARA を踊ろう」

取り上げた曲は、生徒の関心が高く、聞きなじみがあり、踊りやすいテンポ（8カウントずつのかたまりになっている）のもの（主運動「Mister／Kara」補強運動「会いたかった／AKB48」）。また、一年生の時に陸上競技の時間走と体育理論を組み合わせた心肺持久力を高める運動の学習でエアロビクスを行ったが、その時に全体に紹介したステップを選択肢にし、それらを組み合わせて1曲踊れるように構成することを指導内容にした。班編成は、役割分担をして学習が進められることと、有効なかかわりが生まれやすく指導によってできそうな人間関係を考慮して教師が意図的に編成した。そして、ダンス構成を立案する段階では班の中を更にAグループ（3～5人）Bグループ（3～5人）に分けて追究させた。

○授業の実際

グループごとステップ構成を考えて自分達なりに曲に合わせて踊ることができるようになってきた生徒達。この時間は、中間発表会で共に踊りあう（従って「ダンスパーティー」とした）学習をした。中央で踊る発表グループの周りで踊り、終わると班毎にステップのつながりの良さ（楽しいと感じたところ）を話し合い、チェックカードに記入していった。

E生「3班のここのつながり、オレ気に入ったんだけど…」

F生「私もそこはいいなと思った。」

G生「弾む感じになるよね」

そして、全部のグループの発表が終わり、中でも特に印象に残っている班とつなぎ部分について、全体のまとめの時間に発表してみると、特定の班の特定の部分に集中していることがわかった。その部分は、前後のステップからサイドステップへ移行している部分であった。そこで、教師は「構成材料である5つステップの中で、サイドステップだけが非日常的な横への体重移動によって体幹が揺れる動きであり、それを組み込むことが変化の幅をつくっている。そのために動きの楽しさがあったのだ。」と確認した。すると、さらに演技構成を工夫し始め、サイドステップをどのように組み込んだらよいかを考えるグループの姿があった。



【考察】

曲に合わせて自由に体を動かすことに抵抗感を示しがちな中学生期の生徒だが、今回の教材づくりの特徴である「選択式」「仲間との共同学習」によってリズムに乗ってステップを踏むところから体を動かすことができるようになった。また、他のグループのダンスを実際に踊って“良さ”を感じる活動では、ステップの組み合わせ方によって体を感じる楽しさが違うことや、ダイナミックに体幹を動かすことがリズムダンスにおけるの楽しさを感じるのだということを知るという学習によって、かかわり方の幅が増えたと思われる。

②生徒同士のアドバイス活動が積極的に行われる環境づくり

《事例5》ビデオカメラの追いかけて再生機能で技のできればえを確認したり、学習資料や示範ビデオと比較したりしながら、ペアで課題追究したマット運動

～「マット運動」H20年度の1年生より～

○使用した視聴覚教材・教具

- ・追いかけて再生ビデオカメラ

ハードディスク内蔵 DVD レコーダーによって、約1分後に自分の試技が画面に写るようにしたもの。自分の試技を客観的に観ることができることや、その映像と目指す姿（学習資料や示範ビデオ）を比較して自分の課題をより適確に捉えることができる。

- ・長野市ポータルサイト VOD 教材（示範ビデオ）

動画コンテンツなので、追いかけて再生で映し出された自分の動きと比較しやすい。

- ・体育実技の手引き

静止画（連続写真）や技能ポイントが記載されているため、コツを理解するために活用できる。

○授業の実際

倒立前転に挑戦していたH生とI生のペア。二人とも、壁倒立において倒立のコツをつかんでいたものの、マットの上で倒立から前転の回転を開始させる部分やスムーズな回転ができず回転を仕上げられなかった。マット上での倒立の恐怖心を取り除くために補助をし合っているが、回転の始動がなく腕や体を曲げていくので、つぶれているだけで回転ができず困っていた。そこで二人は「追いかけて再生カメラ」で自分達の試技を確認し、隣に設置してあった VOD

教材での示範と見比べてみた。

H生「こっち（VOD 教材）に比べて私達のは、下にちぢまっているだけって感じで前転していないよね。」

I 生「うん、それに最後に立っている場所もこっち（VOD 教材）の方が遠くになっているよ。」

H生「どうしたら上手く前転できるのかなあ？」

I 生「体育実技の手引きにポイントが書いてあるかも！」

体育実技の手引きで倒立前転の解説を見る二人。そこに、「倒立が静止できるようになったら、下の図のように補助をつけ、倒立から倒れかかったら頭を入れ、背中を丸める要領を知る。」と書いてあることに着目し、自分達が倒立から前転への始動をせずに頭を入れていたという課題に気づくことができた。



しかし、背中側へ倒れることへの恐怖心やそれに対してどのように補助をしてあげればよいのかに対する不安をもった二人は、教師に補助の仕方を教えてほしいと言ってきた。そこで、教師は補助するときの立ち位置や手の出し方、かけてあげる言葉を教え、さらに恐怖心を軽減するための練習の場作りについて指導した。そこで練習を始めた二人は

H生「倒れてきても平気だよ。セーフティマットもあるし…」

I 生「じゃあ、いくよ。」

このような支え合いをしながら、倒立から前転への始動をつかんでいった。

【考察】

自分の身体的な感覚としては課題をとらえられなかったH生とI生だったが、視聴覚教材や視聴覚機器を活用して客観的にとらえられたことによって、効率の良い追究が行えたり有意なアドバイスをしたりすることができた。また、学習資料の活用の仕方の指導によって、生徒同士で自分の課題解決の技能ポイントを見つけ、追究につなげていくこともできた。生徒が自らの技能の状態をとらえるための支援や解決のための手がかりを用意しておくことは、アドバイス活動を活発化させ、生徒相互の有効なかかわりの可能性を広げていくことになると思われる。

6. 研究の成果と課題

(1)「わかって、できる」教材づくりについて

生徒の学習準備状況をとらえ、学習指導要領を理解した上で指導内容を明確にして単元計画を立てることによって、運動が苦手な生徒も意欲的に学習に取り組むようになったり、教師にとっても指導を端的に行う余裕ができたりすることが実感できた。今後は、生徒の学習意欲や学習効果を上げる評価について明らかにしていく必要があると考えている。

(2)「わかる」「できる」ための有効なかかわりについて

教師が意図的にかかわる場面づくりやかかわりを支える教材の提供を行うと、運動を介した関わり方がわからなかった生徒が、意欲的にかかわっている姿が見られるようになった。今後この視点で指導を行い、教師が意図的に仕組まなくてもかかわれる力を培っていきたい。

第 6 分 科 会

研究主題

運動と向き合い、できる手応えを感じながら

ひたむきになって取り組む保健体育学習

～ 指導内容の具体化と「わかる」「できる」を「かかわり」ながらつなぐ

教材化のあり方 ～

やなぎまち
長野市立柳町中学校

日 程

9:00 9:30 9:45 10:35 11:00 11:50 12:00 13:00 13:15 14:15 14:45 15:00

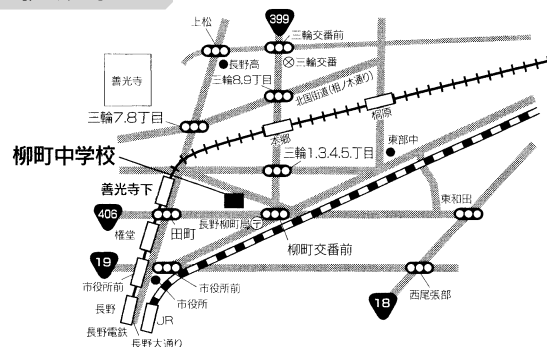
受 付		公 開 授 業 ①	休 憩	公 開 授 業 ②		昼 食	開 会 行 事	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 助 言	閉 会 行 事
--------	--	-----------------------	--------	-----------------------	--	--------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

公開授業内容

① 第3学年 体づくり運動 「実生活に生かした運動計画を立てよう」 弥生体育館

② 第2学年 武道 剣道 「The Aggressive 剣道 2 」 五月体育館

学校所在地



交通機関

- 最寄駅
長野電鉄「善光寺下駅」下車 徒歩 10 分
- 経 路
長野駅
↓ 所要時間 4 分
長野電鉄「善光寺下駅」下車
徒歩 10 分

学 校 概 要

学校名	長野市立柳町中学校		
校長名	玉川隆雄		
学級数	20学級	生徒数	616 名
所在地	〒380-0803 長野県長野市大字三輪1252		
連絡先	TEL 026-234-2128 FAX 026-234-2129		

【学校紹介】

校訓 唯一心 (ただいっしん)

昭和5年5月27日、柳町尋常小学校初代校長小原福治先生の始業式での訓辞「唯一心、至誠、ひやかし半分であるな。樹を大切にせよ。一木一樹皆記念のものである。」より



学校教育目標 思いやり・自由・創造

《思いやり》—敬愛による深い思いやりの心と豊かな感性を育てる—

21世紀は「共生の時代」互いの違いや存在を認めつつ、共に生きていくために、豊かな情操に支えられた優しく思いやりのある生徒を育てます。

《自由》—自らの深い心による正義・真理の実践力を育てる—

自己の欲望や弱い心に束縛されない、独立した自由のために、真の自分らしさや個性につながる心身ともに自律した生徒を育てます。

《創造》—聡明な知性・技能による想像力を育てる—

基礎的な学力の定着を図り、主体性と想像力を育成しながら、変化の激しい時代に対応できる判断力や問題解決能力を育てます。

平成23年度 教育活動の重点

1 学力を保障する学校・日々の授業研究に取り組む学校

- ・全教科・領域等での授業研究会、初任者研修への授業提供、各種研修会への参加を通して、教師の授業力の向上を図る。
- ・実践に対する評価をもとに必修教科、選択教科、総合的な学習の時間を中心とする本校独自の教育課程を修正・改善する。

2 心の教育・生徒指導の充実を図る学校

- ・生徒同士が互いに共感し、支え合い、高め合う人間関係づくりができるように、人権同和教育、道徳、学活などの時間に話し合う機会を設ける。
- ・掃除（黙想・身支度・無言移動・無言一人掃除）への取り組みや食事（配膳への協力・身支度・感謝）への取り組みを見返す活動を位置付ける。

3 学社連携を図るとともに地域から信頼される学校

- ・地域の方と交わす挨拶、町別生徒会を中心とする地域活動への参加を呼びかける。
- ・運動会等の各種行事を公開し、地域の方々にも参加していただくことで、触れ合う機会をもつ。

1 研究主題

運動と向き合い、できる手応えを感じながらひたむきになって取り組む保健体育学習
～指導内容の具体化と「わかる」「できる」を「かかわり」ながらつなぐ教材化のあり方～

2 主題設定の理由

平成 23 年度第 50 回全国学校体育研究大会長野大会の全体研究主題『すべての子どもが夢になり、健康で豊かなスポーツライフの実現をめざす体育学習の創造』－「わかる」・「できる」・「かかわる」楽しさの提供－を受け、本校保健体育科では、生徒一人一人が運動と向き合う中で、できる手応えを感じながら「ひたむき」になって取り組む保健体育の学習の創造を目指している。



本校は活動的な生徒が多く、保健体育の授業の楽しさを感じている生徒が多い。しかし、生徒が感じる「楽しさ」の中身とは、活動欲求が満たされることへの「楽しさ」である傾向が強いと考える。運動と向き合い、その運動のもっている本質的な楽しさ（特性や魅力）に触れながら粘り強く取り組んでいく中で、運動の仕方がわかり、できるようになっていく喜びを生徒に感じて欲しいと願う。また、仲間と互いに見合っただアボイアをし合いながら、ともに技能を高めていき、保健体育の授業を通して指導内容を身に付けた真の「楽しさ」を感じて欲しいと願う。そのため教師が「生徒は活動していても、果たして学びはあったのか」と一時間の授業を分析し、教師の支援のあり方を見返していく必要を感じた。

（１）「運動と向き合う」とは

新学習指導要領の保健体育科の目標では、「明るく豊かな生活を営む」ために「生涯にわたって運動やスポーツに親しむ能力や態度」「健康の保持増進のための実践力」を育成すること、そして「体力の向上」が掲げられている。これらを達成するためには、生徒一人一人が運動を生活の中に必要で意味のあるものと理解し、運動に対して自発的なかかわりがもてるようになる必要があるといえる。その自発的なかかわりを「運動と向き合う」と表す。

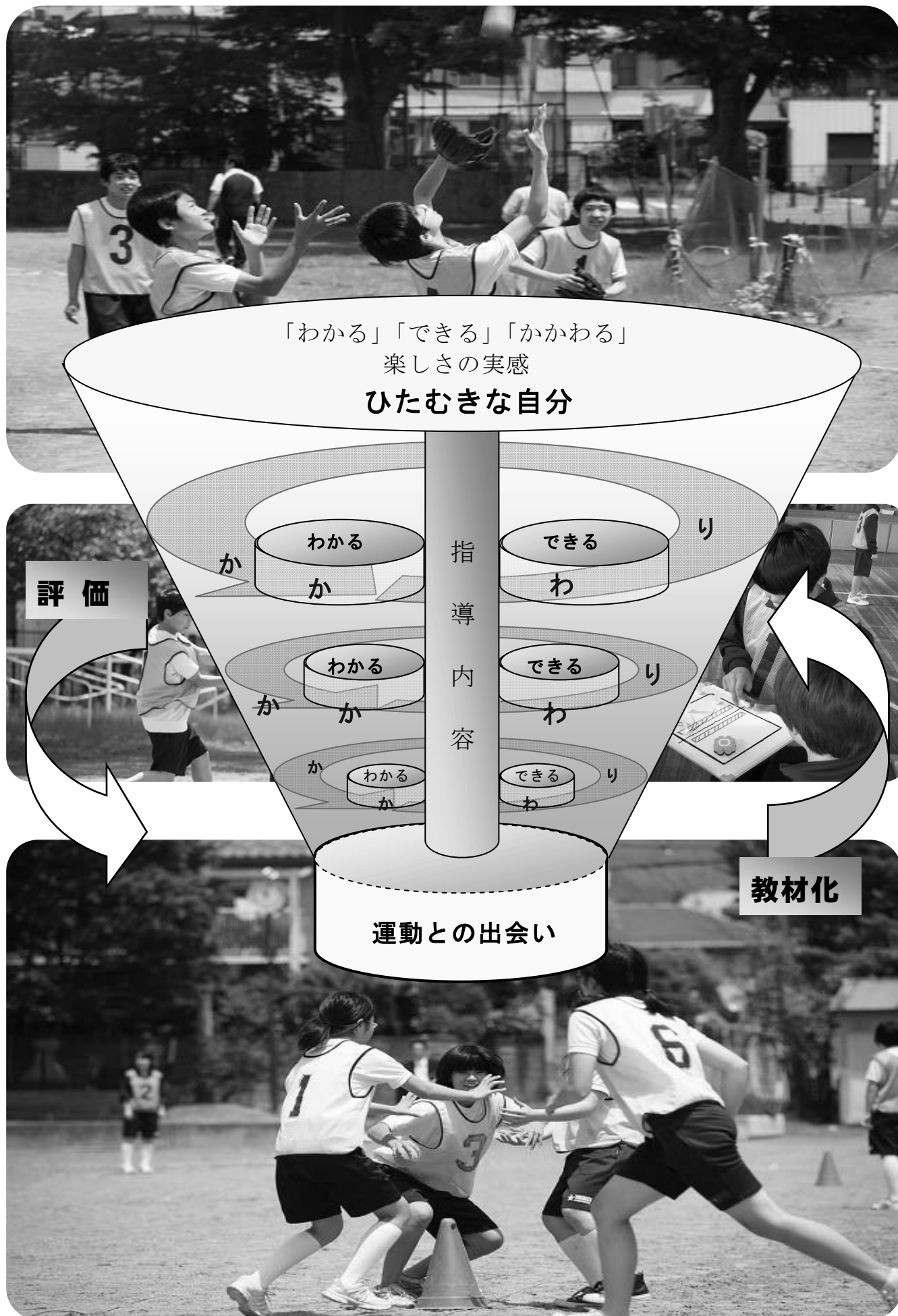
（２）「できる手応えを感じる」生徒

運動のもつ本質的な楽しさ（特性や魅力）に触れていくには、技能を高め、できるようになってきたという実感をもつことが不可欠だと考える。決してうまくはないのだが進んで運動している姿、前回よりも少し変わってきた自分の動きに喜ぶ姿など、生徒が見せる運動と自分との関係を通して、運動と自分との関係性を生徒自身がつかんでいく過程の中に、生徒は「できる手応え」を感じていくだろう。

（３）「ひたむきになって取り組む」には

自分なりに運動を味わえるということは、生涯にわたって運動を楽しんでいくことができる生徒の育成につながるだろう。すなわち運動の楽しさを自分なりに味わえるようになっていく姿を「ひたむきになって取り組む」と表す。「ひたむきになって取り組む」ためには、指導内容や学習課題が明確であり、追究していく生徒の姿に勢いがあり、ともに学び合う雰囲気の良い授業づくりをしていくことが重要である。

以上のことから本研究主題を設定した。



3 研究の仮説

<このような生徒に>

- 活動的な生徒が多く、保健体育の授業の楽しさを感じている生徒が多い。
- 体育学習においては、何を学習するのか課題が焦点化されると意欲的に学ぶ生徒が多い。
- 授業の様子や学習カードの記述から感じられることは、「思い切り走った」「がんばった」「積極的に取り組めた」など、活動欲求が満たされることへの「楽しさ」が多く、運動と向き合って粘り強く取り組んで行く中で「わかった」「できた」という喜びを感じながら、運動にひたむきになってはまり込んでいく生徒は少数であると思われる。
- 生徒の中に、こうなりたいという「めざす姿」はあっても、具体性にかけた課題であったり、具体的な課題をもっていたとしても、それをどのようにして解決していくのかという追究の方法や見通しが不十分であったりする生徒がいる。



<このような手だてをすれば>

○生徒が「やってみたい」「できるようになりたい」という願いをもつための単元の導入

生徒が運動とどのように出会うかが単元の導入では非常に重要である。教師はその出会いをいかに印象的なものにするのかを考え単元展開を構想する。

生徒がこれから行う運動にどのような経験をもっているのか、どのような印象をもっているのかを、事前に今までの学びの様子やアンケート、聞き取り等でできる限りとらえておくようにする。そしてそれを生かし、教師のねがいを加味しながら単元展開を構想していく。初めて行う運動であれば、その運動の醍醐味が伝わってくるような視聴覚映像を見せたり、今ある力でその運動を楽しめるようにルールや場を簡単にしてみたりすることで、初めから運動の特性に触れ、興味や関心がもてるようにする。そして、「これは面白い」「自分にもできそうだ」という思いを抱くことができるように導入の場面を工夫する。

○指導内容が具体的（系統的・発展的）で、生徒が「もっとこうなりたい」という願いを互いに高め合っていくことができる単元展開の構想

その単元で何を学ぶのか指導内容を系統的・発展的に吟味し、生徒の実態に合ったルールや場を工夫するなど教材化する。出会った運動と向き合っていく中で「もっとこうなりたい」というねがいをもった生徒に、仲間との関係を深めていきながらその運動にかかわっていくことができるよう、互いに見合う活動や視聴覚機器を使って振り返る場面をつくり、どのようなことがそれぞれの課題になっているのかペアやグループ、学級で分かち合っていく学習場面を工夫して仕組んでいく。

○生徒が学んだ価値に気づき、これからの学習に生かせるような単元の振り返り

単元終末では、運動への考え方の変化や単元を通してついた力を振り返り、次の単元につなげていきたい課題を明らかにしていく。そのために、技能面ばかりでなく、仲間とのかかわりの様子や学習の進め方などの学び方の面からも振り返りができるようにする。毎時間記入してきた学習カードを見返したり、単元での学びの様子（活動や思いといった学習の足跡）を振り返ったりして、仲間や教師からの評価も参考にし、自分にとってその運動を学んだ価値を明らかにしていく。



＜こうなるだろう＞

- 今の自分を知るとともに適切な自己課題を設定し、「わかる自分」「できる自分」を見つけたり、つくり出したりしていきながら運動に向き合っていくだろう。
- その運動に粘り強く取り組んでいく中で、運動の仕方がわかり、できるようになっていく喜びを感じていくだろう。
- グループやペアとの学習や話し合いを通して、互いが自己の課題を追究し解決していこうとする協同的な学習を進めていくだろう。



4 研究の重点

(1) 指導内容を具体化し、系統的・発展的な学習を展開していく剣道の教材化

今までの剣道の授業では、ただ打突するだけのものが多く、生徒が相手と相対して攻防を通して有効打突を奪い合うという剣道の楽しさを味わうまでに至らないで終わってしまうことが多かった。新学習指導要領の指導内容においては「相手との攻防から有効打突を奪い合うこと（対人的な技能）」が重点とされている。そのためには、対人的な技能を焦点化し、攻防のかけひきを味わわせるために剣道の教材化を考えなければならない。単元の限られた時間の中で学習するには、発達段階に応じた基礎・基本の動きを必要なものに限定し、どのように自分が攻めると、相手はどのように反応するのかという『打突の機会』に重点をおき、「わかる」「できる」「かかわる」という視点から授業を構想していく。

(2) 体づくり運動（体ほぐしの運動、体力を高める運動）の内容の体系化をふまえたカリキュラムづくりと教材化

学習指導要領の改訂で、中学校における体づくり運動の学習のねらいを、第1学年と第2学年では「体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体力を高め、目的に適した運動を身に付け、組み合わせることができるようにする」とし、第3学年では「体を動かす楽しさや心地よさを味わい、健康の保持増進や体力の向上を図り、目的に適した運動の計画を立て取り組む」としている。各学年の授業時数を7単位時間以上確保し、内容の体系化をふまえたカリキュラムづくりや教材化を進めていく。また、自分や仲間の心や体について感じたこと、考えたことを出し合い、体へ問いかけを大切にしながら、実生活に生かした運動の計画を立て実践していけるようにする。

5 研究の内容と実践事例

(1) 指導内容を具体化し、生徒が「ひたむき」になって取り組む剣道の教材化

～第1学年武道・剣道「The Aggressive 剣道」の実践から～

単元導入の4時間は、剣道の動きのイメージをもつことができるように映像を見たり、剣道の歴史や道具の名称など学習したりすることを通して礼法の意味や竹刀の扱い方を学んだ。そして、剣道具を短時間で着けられるように着脱の指導を分散させ、剣道具のつけ方の資料VTRを流し、映像を見ながら剣道具を着けられるようにした。教師は個々に支援に回るようにしたり、仲間同士で着け合ったりするよう指示することで、生徒たちにとって難解な剣道具の着装についての負担を軽減するようにした。



互いに剣道具を着け合う姿

授業の後半で剣道の試合を行うにあたって必要最低限の基本的な動きを獲得するために、類似運動を用いながら学習をした。大きく振りかぶって行う素振りや歩み足などの動作は、中学校の授業段階の試合で直接的に必要性はないと考え省略した。

単元中盤の「なか」では、全体指導の中では踏み込んだ状態から手首を使って面の高さの竹刀を連続して打ち込む練習を行い、ウォーミングアップをかねて打ち込むために必要な動きの定着を図った。



基本的な動作（中段の構えを維持してのすり足）

今回の単元で生徒に味わって欲しい自分が動くことで相手が動いたり、打突してきたりしてきたところを打突するという「攻防の展開」を味わうことができるようにするために、次のような攻めから打突にまでの一連の流れをパターン化したものを提示し、攻防を意識して打突することを図った。

生徒には、「自分が〇〇する（こい）ことで相手は△△なり（きた）、だから□□を打突する（ドン）」といった動作を「こいーきたードン」という言葉に置き換えて、攻めから打突までの一連の流れを意図的につくれるように促した。相手の反応を見て打突することは経験者ですら難しい。相手の反応を自分が誘発するように意識することで、どこを打突部位を打突することができるのかを予測しながら相手と攻防し合えることに重点をおいて学習を進めるようにした。

生徒の学習カードの記述を見ても「しっかり打ちたい」や「声を大きく出したい」とい

- (1) 一歩退く→相手が一歩前に出る→出頭の面
- (2) 竹刀を裏にまわす→もとに戻そうとする→面
- (3) 胴を打とうとする→出頭の面の機会ととらえて面を打とうと手元を上げる→面
- (4) 一歩前に出る→出頭の面の機会ととらえて面を打とうと手元を上げる→抜き胴
- (5) 剣先を下げる→相手は打突する機会ととらえて面を打突しようと手元を上げる→抜き胴
- (6) 面を打とうとする→相手は面を防ごうと防御の姿勢に入る→胴

った基本的な動きに関しての記述から「相手の動きを判断したい」や「相手を動かすための動き方を考えたい」といった攻防のかけひきについての内容が多く見られるようになった。(下図参照)

単元中盤の「おわり」の4時間では、授業のはじめに「なか」で行った練習を発展させ、連続した打突に合わせて踏み込む練習を行って、気・剣・体を一致させて打ち込むための動きの定着

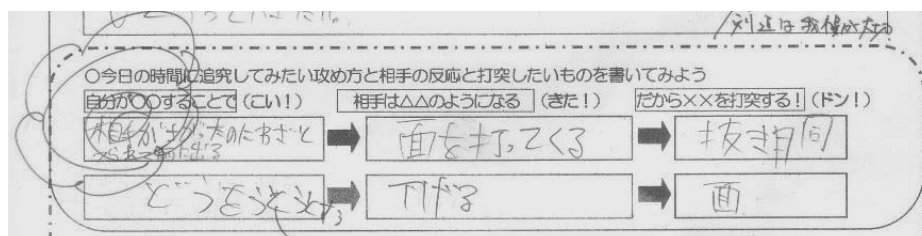
を図った。その後、6つのパターンの中で自分が追究してみたいパターンをグループで練習してから試合を行うようにした。グループでの追究や試合では、チームの勝利のために仲間に情意的な励ましだけでなく、積極的に技能的なアドバイスを行う姿も見られた。

第10時では、「こいーきたードン」の一連の流れが試合の中でも定着し、意図的な攻防のかけひきによる有効打突を奪うことができた喜びを味わうことができた生徒が多く見られてきた。

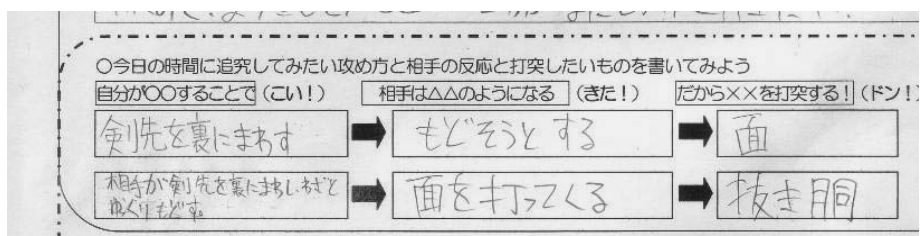


試合の中での(5)剣先を下げる→相手は打突する機会ととらえて面を打突しようと手元を上げる

さらにこの6つの攻めのパターンを発展させ、新たな攻めを考える生徒も出てきた。N生は、「相手がさがったときわざと前に出る→相手は面を打ってくる→抜き胴」「相手が剣先を裏にまわすのに対してゆっくりと竹刀を戻す→相手は面を打ってくる→それに対して抜き胴」というように自分で相手との攻防を考える生徒も出てきた。剣道の魅力に触れ、自分の思うような動きをつくり出したいと願うひたむきな姿がこのような学びを生み出したと考える。



N生の第9時の学習カード



N生の第10時の学習カード

(2)「わかる」と「できる」を「かかわり」ながらつなぐ体づくり運動の教材化

①第1学年体づくり運動(体力を高める運動)「自分のペースを見つけて走ろう～10分間走～」の実践から

長野市の中心街に位置する本校の通学区には6つの小学校があり、全生徒が徒歩により通学している。通学距離が近い生徒は数分歩けば登校できるが、遠い生徒は約1時間歩いて登校してくるというように徒歩による通学距離が広範囲の通学区であるという実態である。中学校に入学して間もない一年生にとって、教科書の詰まった重い鞆を背負い、長い距離を歩いて登校しなければならない試練が中学校生活のスタートに待っている。そこで、入学して間もない1学期前半に、今の自分の体力をどのようにとらえているか、また、今後どうやって体力を高めていけばよいのかを、通学という視点から体づくり運動（体力を高める運動）の授業を行った。

「体づくり運動」における「体力を高める運動」の中で「動きを持続する能力を高める」というねらいを達成するために持久走を教材化した。持久走は自己に適した速さで長い時間を気持ちよく走り続けることで、走り方やペース配分に伴う体の状態に気づき、それに応じた走り方やペースを体得していく過程、及び走り終わったときの達成感や爽快感を味わうことが楽しさにつながる運動である。

持久走における指導内容の中から「このくらいのペースで走れば、一定時間に無理なく走ることのできる」という自分の走りとの関係をつかんでほしいと願い、本校では「ペース」に焦点を当てて学習を進めるにした。

持久走における生徒の実態は、どのくらいのペースで走ればどのくらいの距離が走れるのか、また、どのくらい疲れるのか、というような力の配分が体でわかっていない生徒が多い。したがって、ペース配分がわからずに前半とばしすぎて、疲労感や呼吸の乱れから後半に記録の落ち込みが激しかったり、逆に全体的にゆっくり走りすぎて、余力を残してゴールしたりする生徒が多い。ペースをグラフに描かせると大きなペースの落ち込みが見られたり、落ち込みこそ少ないが記録が伸びていなかったりといった状況が見られる。



単元を通してペア学習を取り入れ、互いに学習カードに記録したり、ペース配分や疲労の度合いについて互いに声がけしたりしながら、気持ちよくたくさん走れるようになることを目指した。第5時、2回目の走りを終えた後の振り返りにおけるA生の学習カードが次の通りである。

今日2時間目の体育で2回目の10分間走をやりました。前回の結果をもとにペース設定を修正して走りました。私は先に走りました。呼吸法などにも気をつけました。ペアのCさんが、「後〇〇メートルだよ」とか「腕を振ってリズムをとって」と声をかけてくれて、今の自分の走りがどうなっているのかとてもよくわかったし、うれしかったです。結果は目標を上回りました。前回よりも40メートルのびました。Cさんが協力してくれたおかげで自分のペースで走ることができました。

1分間ごとに走った距離をペアが学習カードの表やグラフに記録していく活動である。A生は自分が設定したペース（めあて）がはっきりしていたので、ペアのC生からの「あと〇〇メートルだよ」や「リズムを取って」といった声がけは、このくらいのペースで走れば（「わかる」）一定時間にこのくらいの距離が走ることができる（「できる」）という、自分の走りとの関係を、友との「かかわり」のなかでつかんでいった姿であると思われる。



②本校における体づくり運動のカリキュラムの考え方

○第1学年

1	2	3	4	5	6	7
オリエンテーション	共通メニュー〔準備運動 学習内容の確認〕					
	体ほぐしの運動 (気づき・調整)	体ほぐしの運動 (交流)				
		体力を高める運動 「動きを持続する能力を高める」ために 「自分のペースを見つけて走ろう～10分間走～」				
	共通メニュー〔整理運動, まとめ, 学習カードの記入〕					単元のまとめ

○第2学年

1	2	3	4	5	6	7
オリエンテーション	共通メニュー〔準備運動 学習内容の確認〕					
	体ほぐしの運動 (気づき・調整)	体ほぐしの運動 (交流)				
		体力を高める運動 効率のよい組み合わせ (一つのねらいの運動の組み合わせ) バランスのよい組み合わせ (ねらいの異なる運動の組み合わせ) 活用シートの見方・使い方				
	共通メニュー〔整理運動, まとめ, 学習カードの記入〕					単元のまとめ

○第3学年

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
オリエンテーション	共通メニュー〔準備運動 学習内容の確認〕				運動の日常的実践	共通メニュー〔準備運動 学習内容の確認〕				
	体ほぐしの運動 (気づき・調整・交流)					体ほぐしの運動(自己の課題に応じた活動の選択)				
	体力を高める運動 運動例の実践 運動の計画を立てる① ねらいに応じた計画と実践					体力を高める運動 運動の計画を立てる② 健康に生きるための体力を高める運動の計画と実践 運動を行うための体力を高める運動の計画と実践				
	共通メニュー〔整理運動 まとめ 学習カードの記入〕					共通メニュー〔整理運動 まとめ 学習カードの記入〕				単元のまとめ

6 研究の成果と課題

(1) 形成的授業評価法からみた授業分析

～第1学年武道・剣道「The Aggressive 剣道」の実践から～

どの項目も概ね評価5を記録しており、剣道の授業としては総合的に評価が高かったことがうかがえる。これは、第4時までには本単元で必要な最低限の基本的な動きを学習し、攻防の展開に指導内容の重点をおいたことによると考える。そして、「意欲・関心」の項目も第6時以降は2.8以上を記録しており、剣道の本質的な楽しさ（特性や魅力）に触れる生徒が多くなってきたと考察できる。また、「協力」に関しては全ての時間が評価5を記録しているが、単元の振り返りカードを見ても仲間とかかわることの重要性を再認識したり、良さを実感したりした生徒が多く見られた。

全体	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時	第10時	第11時	第12時
成果	2.66	2.83	2.82	2.70	2.86	2.92	2.82	2.74	2.70	2.77	2.75
評価	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
意欲・関心	2.75	2.90	2.81	2.76	2.88	2.88	2.87	2.86	2.83	2.86	2.86
評価	3	4	3	3	4	4	4	4	4	4	4
学び方	2.45	2.62	2.74	2.64	2.82	2.73	2.78	2.79	2.76	2.81	2.83
評価	3	4	4	4	5	4	4	4	4	5	5
協力	2.96	2.94	2.93	2.98	2.85	2.95	2.94	2.92	2.86	2.97	2.90
評価	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
総合評価	2.70	2.82	2.82	2.76	2.85	2.87	2.85	2.82	2.78	2.85	2.83
評価	4	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5

(2) 剣道の打突の機会という運動の仕方を理解し「できる手応え」を感じていったY生の学びの姿から

Y生は、剣道経験はなく、控えめで思ったことをなかなか口にできなかったり、周囲の意見に流されてしまったりする傾向のある生徒である。本単元において第5時までは、自分から進んで学習する姿をあまり目にはすることはなかった。形成的授業評価においても「学び方」の評価が高くなかった。しかし、第6時に竹刀の物打ちで打突するためにはどうすればよいのか困っていたときに、チームの仲間に「腕をのばしながら、剣先で打突する感じ」というアドバイスをもらってから自分の課題を解決する糸口を見つけ、もの打ちでの打突ができるようになってきた。

第7時には「右足を強く前に出さないと打突も素早くできないし、力も入らないので、地面に力強く踏み込みたい」という打突の質の向上を大切にしていって取り組む姿が見られた。チーム練習のときに、Y生は、チームの仲間に「踏み込み」という観点で見るように伝え、技能面での具体的なアドバイスを受けていた。Y生本人の中で、打突に関して腕の動き方、踏み込み足の仕方など技能が高まっていく過程で、仲間に自分の見て欲しいところを明確に伝えることで、技能に関してのアドバイスをもらおうといったかかわりを生み出し、技能向上につながった。ここに剣道の打突という運動の仕方を理解し「できる手応え」を感じて活動している姿があったのではないかと考える。



一本取れた過程を話すY生

また、第8時には「相手の動きの先を読み、察知することが大切だと思った」とカードに記述している。Y生は、「ただ打突するだけでは、有効打突は奪えない」ということを実感し、本単元の指導内容を理解していると思われる。

そこで教師は、第9時に自分が習得したい攻めの練習に入っていた。Y生は、「竹刀を裏にまわしてとる面で、相手が竹刀を戻す瞬間に面を打つことは難しい。相手の動きを見逃さないで素早く打突したい」という課題をもち、グループの仲間と練習する中で、汗をかきながら課題に取り組んでいた。

そして、第10時に「今日のはじめて試合で一本取れた」という達成感について記述している。Y生が達成感を味わえたのは、Y生が今回学習してきた内容が、Y生にとってかけはなれたものではなく、「もう少しやればできるようになるかもしれない」「これ（自己課題）ができるようになるためには仲間が必要」というかかわりが生まれていたからだと考える。それが、剣道を深く追究していくひたむきな姿につながったと考える。今後も指導内容を明確にして、Y生のようにできる手応えを感じながら「さらに上手になりたい」という願いを単元通してもち続け、ひたむきに活動していく生徒を増やしていきたい。

※引用・参考文献

- ・「中学校学習指導要領解説 保健体育編」 文部科学省 平成20年 9月
- ・「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」 文部科学省 平成21年12月
- ・「新学習指導要領に基づく中学校・高等学校における保健体育科リーフレット」
文部科学省 平成23年 4月
- ・「長野県中学校教育課程学習指導手引書 保健体育編」 長野県教育委員会 平成22年9月

第 7 分 科 会

研究主題

「わかる」「できる」「かかわる」楽しさが味わえる保健体育学習のあり方

～ 教科の特性を生かした言語活動の充実 ～

信州大学教育学部附属^{ながの}長野中学校

日 程

9:00 9:30 10:20 11:00 11:50 13:00 13:10 14:20 14:50 15:00

受 付	公 開 授 業 ①	休 憩	公 開 授 業 ②	昼 食	開 会 行 事	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 行 事
--------	-----------------------	--------	-----------------------	--------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

公開授業内容

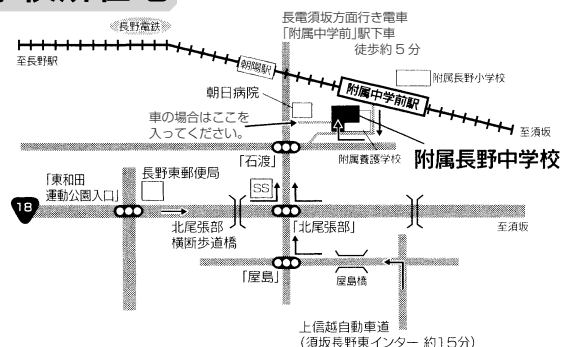
第2学年 ダンス（現代的なリズムのダンス）

体育館

第3学年 体育理論

体育館

学校所在地



交通機関

○最寄駅

長野電鉄「附属中学前駅」下車 徒歩2分

○経 路

長野駅

↓ 所要時間 13分

長野電鉄「附属中学前駅」下車

徒歩2分

学 校 概 要

学校名	信州大学教育学部附属長野中学校		
校長名	渡辺 隆一	副校長名	小松 寅雄
学級数	15学級	生徒数	588名
所在地	〒381-0016 長野市南堀109		
連絡先	TEL 026-243-0633	FAX	026-263-0901

【学校紹介】

○学校の沿革

本校は、昭和22年、長野市西長野に「長野師範学校男子部附属中学校」として創立され、信州大学設置、長野師範学校閉校に伴い、昭和26年より現名称になった。

昭和32年には長野市西長野加茂に移転し、その後、昭和55年に長野市郊外の朝陽野に校舎を新築移転し、現在に至っている。



毎年5月には公開研究会を実施し、本校の研究の成果を発表している。また、今年度から9月に秋の公開研究会も実施し、地域の教育の向上、発展に積極的に寄与してきている。

○学校教育目標

「ともに学び 一人となる」

○経営の目標

「心をたがやし、いのちを大切にする」

- ・求めて進学してきた生徒・保護者の負託に応えられるようにする。
- ・かけがえのない生徒一人一人が、自らの可能性を伸ばし、持ち味を発揮しながら、心豊かに生きぬく力を高め、将来への「夢と希望」をもてるように教育活動を充実させる。

○目標具現のための重点

「律する 徹する 極める」

- ・相手の立場に立ち、よりよい人間関係をつくろうと努める生徒
- ・自分の考えをもち、友とかかわって学び、振り返って確かめる生徒
- ・附中生としての誇りと気品を持ち、自らを高める生徒

1 研究主題

「わかる」「できる」「かかわる」楽しさが味わえる保健体育学習のあり方
～教科の特性を生かした言語活動の充実～

2 主題設定の理由

本校保健体育科では、学校教育目標「ともに学び 一人となる」の下、一人一人の生徒が仲間のよさに学びながら自らの課題を解決し、自主的に運動に取り組む生徒の姿を目指している。これは、長野県が研究主題として掲げている「夢中になる」姿の具体、「指導内容を身に付け、運動の特性や魅力に十分に触れている姿」と同じ意味として解釈している。そして、この姿を具現するためには、教科の特性を生かした言語活動を媒介として、「わかる」「できる」「かかわる」楽しさが味わえる学習を積み重ねていくことが必要であると考えます。

本校生徒の全体的な傾向として、技能を高めたいという願いの下、どの領域の運動にも真面目に取り組もうとする生徒が比較的多い。部活動やクラブなどの社会体育の活動に参加している生徒についてはその傾向が強く見られ、日常生活の一部として運動に親しんでいることがわかる。反面、体育の授業以外に運動に取り組む機会が少ない生徒については、「自分は運動ができない」、「運動が不得意である」という思いを強くもち、主体的に運動に取り組むことに抵抗を感じている傾向が見られる。

このような、「できる、できない」という一面だけで運動をとらえがちな生徒たちにも、私たち教師は、できるに至るまでの過程で味わうことのできる「わかる」や「かかわる」楽しさ、喜びを味わってほしいと願っている。そして、「わかる」体験や「かかわる」体験を通して、「できる」楽しさ、喜びを味わってほしいと強く願っている。そのために、「わかる」「できる」「かかわる」楽しさを明確にとらえた上で、日々の授業を実践していくことが重要であると考えた。

(1)「わかる」楽しさとは

新学習指導要領における体育分野の目標では、第1学年及び第2学年では「知識や技能を身に付け」、また、第3学年では「知識や技能を高め」と謳われており、いずれの学年においても、「知識と技能を関連させて学習することが大切」であることが強調されている。つまり、運動ができるようになるためには、まず、その運動の行い方がわかることが必要であるという考え方である。

そもそも、運動が「できる」ようになるために必要な知識や技能はそれぞれ単独で存在しているのではなく、相互にかかわり合って存在している。運動を行う多くの場合、最初は、その運動の行い方を理解することから始めるが、行い方を理解することができた生徒は、「できる」ようになりたいという意識をもって運動に取り組み、「できる」を実現していくだろう。このように、「わかる」をもって運動に取り組む中で「できる」楽しさを味わうことができた生徒は、よりよく運動を行うための技術的なポイントや作戦などといった次の次元の知識を理解しようとし、さらに仲間とかかわりながら、次の段階の「できる」を求めて運動に取り組んでいくと考える。「わかる」は「できる」を生み出す基となるものであると考える。そこで、本校では、生徒が



運動に関する知識を身に付けたり，運動の行い方を工夫したりしながら，運動に取り組むときに感じる楽しさを，「わかる」楽しさととらえた。

(2)「できる」楽しさとは

保健体育学習における一番の醍醐味は，やはり，できなかったことができるようになったときに感じる楽しさや喜びを味わうことであると考えます。これは，運動の技能が高いかどうか，運動が好きか嫌いかなどにかかわらず，誰にとっても当てはまることである。本校では，生徒が自主的に運動に取り組む中で，その運動の特性や魅力に触れた技能や動き方を身に付けることができたときに感じる楽しさを，「できる」楽しさととらえた。様々な運動経験（レディネス）をもつ生徒たちが同じ場で学習する体育授業においては，「これならば自分にもできるかもしれない」という期待感や，「〇〇を～のようにやれば，できるようになるのだな」という見通しがもてるようにすることで，生徒の運動に取り組む意欲を掻き立てることができると思います。そして，指導内容に照らすことはもちろんのこと，徹底した生徒の実態把握に基づく教材づくりを行うことで，目の前の生徒たちが運動に自主的に取り組めるようになり，すべての生徒が「できる」楽しさを味わうことができるようになると思います。

(3)「かかわる」楽しさとは

平成 20 年 1 月の中央教育審議会の答申において示された中学校保健体育科の改善の基本方針では，「体を動かすことが，身体能力を身に付けるとともに，情緒面や知的な発達を促し，集団活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや，筋道を立てて練習や作戦を考え，改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ」た上で，指導内容を整理し体系化を図ることが記されている。これは，体を動かすことを，単に，技能や動き方を身に付ける「できる」を保障するものとしてとらえているのではなく，練習の仕方や作戦などを考えることによって理解を深める「わかる」を保障するものとしてとらえているということである。また，体を動かす活動と同様に，話し合う活動も仲間とのかかわりの中に存在するものであり，仲間とコミュニケーションをすることによって「わかる」と「できる」がつながりをもったものになっていくと考える。このように，仲間と一緒に運動に取り組む中で，その運動が「わかる」ようになっていたり，「できる」ようになっていたりすることに有効に働くかかわりができたときに感じる楽しさを，「かかわる」楽しさととらえた。

以上のような定義の下，私たちは，保健体育の授業において，すべての生徒に「わかる」「できる」「かかわる」楽しさ味わわせることで，仲間のよさに学びながら自らの課題を解決し，自主的に運動に取り組む生徒をはぐくむことができると考え，本研究主題を設定した。

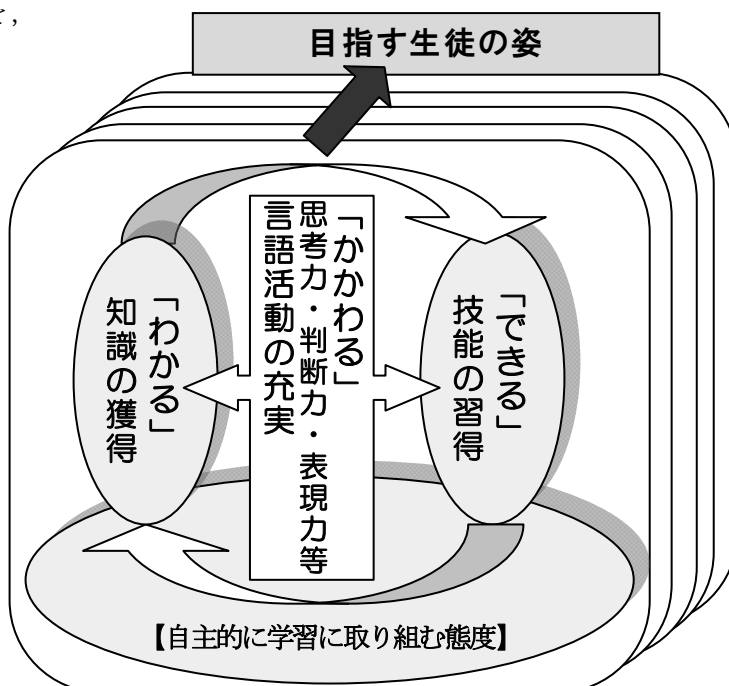


図 1 附属長野中の体育学習のイメージ図

3 研究の仮説

【このような子どもたちに】

- 運動経験の有無や得意・不得意に差は見られるものの、多くの生徒は、できるようになりたいという意欲をもっており、どの領域の運動にも真面目に取り組むことができる。
- 教師が提示した練習方法に対して、そのポイントに沿って意欲的に追究する生徒が多い。
- △体育の授業でしか運動を行っていない生徒の姿として、運動に対する苦手意識が強く、「できない」という思いから運動へのかかわりが消極的になりがちな傾向が見られる。
- △できたことやできるまでの学びのよさについて自己評価する力が身に付いていない。



【このような手だてを講じれば】

- ◆教材づくりにかかわって
 - ・生徒の実態に合わせて指導内容（つける力）を決め出す。
 - ・生徒の意識の流れに配慮し、無理のない活動の流れを考えたやさしい教材づくり。
 - ・単元の導入における運動や事象との出合わせ方と見通し（目標）のもたせ方を工夫する。
- ◆学習過程にかかわって
 - ・単元前半では、教師がリードしながら習得を中心とした学習を、単元後半では、生徒の追究意欲に沿って進めていく活用中心の学習を位置付ける。
 - ・自分が練習したことや学んだこと、また、学びのよさについて振り返る機会を、毎時間の授業や単元の終わりに意図的に位置付ける。
- ◆言語活動にかかわって
 - ・学習内容にかかわって話す（説明する）、聞く（質問する）、考える（検討、意見交換）、書く（まとめる）などの活動を、毎時間の授業に位置付ける。
 - ・生徒同士のかかわり合いの中で、自己評価や相互評価がし合えるようにするための観点や共通の資料等を設ける。



【このようになるだろう】

- ・身に付けた知識や技能を活用して、よりよくできる、よりよくわかるようになりたいと自主的に学習に取り組むようになる。
- ・根拠をもって自分の考えを伝え合うことができるようになり、より技能を向上させたり、知識の理解を深めたりするようになる。
- ・客観的な観点に即して、自分ができるようになったことやわかったことを自覚することができ、運動に対するよいイメージをもち、自主的に運動にかかわるようになる。
- ・運動のもつ楽しさや喜びに触れることで、これからも運動にかかわっていこうとする思いをもつようになる。

4 研究の重点

- ① 生徒の実態把握に基づいた指導内容の決め出しと教材づくり
- ② すべての生徒が課題意識をもち、自主的に体育学習に取り組めるような習得と活用を位置付けた学習過程の工夫
- ③ 仲間との豊かなかかわりの中で、自分の考えを深めたり、広めたりしていく言語活動のあり方

5 研究内容と実践事例（仮説を導き出した事例）

【事例1：ダンス（現代的なリズムのダンス）（2年）】

(1) グループの仲間と自分達の願いに合うダンス構成シートを見返し、中間発表会での他グループの仲間からのアドバイスを基に、動きの修正点を決め出したF生

第5時、F生のグループは、前時から作成している自分達の願い（ダンス構成シート1

1)に合うダンス構成シートを基に、Bメロの最後の部分を以下のように検討し始めた。

F生1：動きのイメージは、「体をくずす」にしましょう。動きの速さは、速すぎず、遅すぎずの8拍でよいと思います。

I生2：「ベーシックカード」は激しい動きの「ランニングマン」から、スムーズに最後の「ポーズ」が決められるように、動きを合わせやすい「縦のり」にしよう。

M生3：よいと思います。動きのイメージが「体をくずす」だから、「アイテムカード」は「空気入れ」がよいのではないかな。[「空気入れ」の動きをやって見せる]

F生4：「縦のり」の動きに合っているね。みんなで、試しに踊ってみましょう。

[全員で踊り試した後]「縦のり」と「空気入れ」の組み合わせは、「体をくずす」感じがよく分かるので、この組み合わせにしましょう。

その後、F生は、グループの仲間とポーズの部分も考え、何度も踊り試しながらダンス構成シートを完成させた（ダンス構成シート1）。

第6時、中間発表会で、他グループからのアドバイス（ワークシート1）を受けたF生のグループは、以下のような話し合いを行った。

ダンス構成シート（課題曲：「国民的行事」） (B)グループ

【メンバー】									
M生	I生	A生	F生	H生	Y生	K生	1		
前奏	動きのイメージ	ワッ	ワッ	サビ	進む感じ	進む感じ	A	はずみ	はずみ
	動きの速さ	8	8		8	8		16	16
	動きの組み合わせ	アイテム	手拍子		腕回し	腕回し		腕広げ	腕広げ
		ベーシック	縦のり		トラップ	トラップ		縦のり	縦のり
	拍	8	8		8	8		8	8
B	動きのイメージ	元氣	元氣	元氣	元氣	元氣	B	体をくずす	体をくずす
	動きの速さ	16	16	8	8	8		8	8
	動きの組み合わせ	アイテム	サル手	サル手	わがまん	わがまん		空気入れ	クリコ
		ベーシック	サル足	サル足	縦のり	縦のり		縦のり	縦のり
	拍	8	8	8	8	8		8	8

(ダンス構成シート1)

アイテムカード×ベーシックカードの選択に問題は無い。激しい動きからゆるい動きがいいと思う。
さらに自分達の原曲にある「はずんで、はじけて」を意識して全体的に動きをもっと大きくした方がいい。

(ワークシート1)

Y生5：自分達の願いの「はずんで、はじけて」を考えると、確かに動きをもっと大きくした方がいいですね。どの部分を大きくすればいいのだろう。

A生6：前奏の部分の「アイテムカード」の「手拍子」は、その場での踊りになっている感じがする。だから前奏の「アイテムカード」を変えてみよう。

F生7：その場での踊りということであれば、Bメロの最後の部分もあえて「縦のり」を選ぶ必要はないですね。大きく動ける「ベーシックカード」を選びましょう。そうすれば「はずんで、はじけて」に、もっと合った動きになりそうですね。

H生8：では、前奏とBメロの最後の部分を修正していきましょう。

そして、授業の終末でワークシートに振り返りを記入した（ワークシート2）。

自分達の願いにある「はずんで、はじけて」と考えると確かに動きをもっと大きくしたほうが良いと思った。特に前奏とBメロの最後は動きが小さいので、これからみんなでも動きを修正していきたい。

（ワークシート2）

【考察】第5時、Bメロ

の最後の16拍分の前半の動きを考える場面で、F生は、自分達の願いの最後の部分「体をくずして踊ろう」を動きのイメージに加えることと、動きの速さは、速すぎても遅すぎても動きのイメージに合わないと考え、8拍で踊ることを提案した（F生1）。動きの組み合わせでは、前の激しい動きから、スムーズにポーズを決めるために「縦のり」の提案（I生2）を受けた。また、「体をくずす」という動きのイメージにも、「ベーシックカード」の「縦のり」にも合う「空気入れ」の提案（M生3）を受け、グループの友と踊り試したF生は、動きの組み合わせが自分達の願いに合っていると感じた（F生4）。

しかし、第6時の中間発表会において、他グループの仲間からのアドバイス（ワークシート1）を受けて、前奏の部分が、その場での動きになっているという友の意見（A生6）を聞いたF生は、Bメロの最後の部分の「縦のり」も、前奏の動きと同様にその場での踊りになってしまい、動きが小さいという印象を与えているのではないかと考え、修正することを提案した（F生7）。そして、修正することで、より自分達の願いに合った動きになるのではないかと考えた（F生7、ワークシート2）。

これは、グループの仲間と自分達の願いに合うダンス構成シートを見返し、中間発表会での他グループの仲間からのアドバイスを基に、動きの修正点を決め出すことができた姿である。

(2) 自分達のダンスを撮影したVTR映像の視聴や、モニターからのアドバイスを基に、「見る観点」に沿ってダンス構成シートを検討し、より自分達の願いに合う動きに修正していたF生

第7時、前奏部分の「アイテムカード」である「手拍子」を、縦一列に並び、時間差で腕を左右に伸ばす「腕伸ばし」に修正した（ダンス構成シート2¹、写真1）F生のグループでは、本時、次のようにBメロの最後の部分を検討した。

F生9：[Bメロの最後をVTR映像で見て]やはり、動きが小さく感じる。自分達の願いの「はずんで、はじけて」に合っていない気がします。

H生10：みんなのダンスを見て、もっと全身を使いながら大きく動くと思いました。前の時間にFさんも言っていましたが、「ベーシックカード」の「縦のり」を移動のある動きに変えてみてはどうでしょうか。

F生11：[「動きのヒント」の「ギャロップ」に書かれている「上半身を工夫できる」を指さしながら]「ギャロップ」にしてみますか。

K生12：「ギャロップ」の横の動きを大きな動きと言ってもよいのかな。

I生13：臨機応変に変えてみようよ。斜めに動いてみたらどうだろう。

F生14：では、斜めに動く「ギャロップ」にしてみましょう。「トライステップ」のときと同じように、動きの速さはスムーズに動くことができる8拍でよいですね。

H生15：「アイテムカード」は、クロールや平泳ぎの手の動きにしてはどうでしょう。

I生16：よいと思いますが、他の部活動で考えると、テニスラケットを振る動きはどうでしょうか。この方が「ギャロップ」に合いそうな気がします。

F生17：[ラケットを振る動きをやってみる]ラケットを振る動きでよいかもしれない。この組み合わせの方が、大きな動きになりそうですね。

その後、「ギャロップ」に合わせて、ラケットを振る動きを何度か踊り試し（写真2）、「テニス」という名前を付けて、ダンス構成シートに記入した（ダンス構成シート2[2]）。本時の終末では、Bメロの最後の部分を修正したことについての振り返りをワークシートに記入した（ワークシート3）。

【考察】本時、VTR映像を視聴したF生は、動きが小さく見えたことから、自分達の願いである「はずんで、はじけて」に合っていないことを確認した（F生9）。そして、モニターとしてダンスを見ていた仲間の、「移動のある動きに変えてみた方がよい」という提案（H生10）を受け、大きく動くことができる「ベーシックカード」で、「動きのヒント」に「上半身を工夫できる」と書いてあった「ギャロップ」を提案した（F生11）。その後、横移動の動きが、大きな動きといってよいのか分からないという意見（K生12）も出されたが、「臨機応変に変えてみよう」とのI生の発言（I生13）から、横の動きを斜めにしても基本的な動きは変わらないと考えて、「ベーシックカード」は「ギャロップ」でよいと改めて確認した（F生14）。また、サビの部分の「トライステップ」の動きの速さを決め出したときに、速すぎても遅すぎてもスムーズに動くことができずに8拍に決めたことを生かし、動きの大きい「ギャロップ」も同様に、動きの速さは拍と同じ速さが適当であると考えて、8拍を提案した（F生14）。次に、

「アイテムカード」を検討する場面では、部活動の動きをヒントにした提案（H生15）から、より「ギャロップ」に合いそうな、テニスラケットを振る動きの提案（I生16）を聞き、実際に踊り試すことで、大きな動きになりそうなことを実感することができた（F生17）。

これは、自分達のダンスを撮影したVTR映像の視聴や、モニターからのアドバイスを基に、「見る観点」である「自分達の願いに合うように①動きの速さを変えている②動きの組み合わせを工夫している」に沿ってダンス



写真1：修正した前奏の部分を踊るF生



写真2：動きの組み合わせを確認するF生

ダンス構成シート（課題曲：「国民的行事」）（B）グループ									
【メンバー】					【自分の願い】				
M生 I生 A生 F生 H生 Y生 K生					チームで決めた目標に達しないところは速く臨機応変に動き、はずんで、はじけて、動きを使おう！身体をくずして踊ろう！				
前奏	動きのイメージ	リリリ	リリリ	1	進み	進み	はさみ	はさみ	かこ
	動きの速さ	8	8		8	8	16	16	止まる
	動きの組み合わせ	アイテム 腕伸ばし 腕伸ばし	サビ		腕回	腕回	腕伸ばし	腕伸ばし	座る
	ベースの	縦のり	縦のり		トライ	トライ	縦のり	縦のり	ポーズ
	拍	8	8		8	8	8	8	8
B	動きのイメージ	元気よく	元気よく	元気よく	元気よく	元気よく	元気よく	元気よく	元気よく
	動きの速さ	16	16	8	8	8	8	8	8
	動きの組み合わせ	アイテム サル手	サル手	わやん Japan	わやん Japan	サビに	サビに	テニス	バレーボール
	ベースの	サル足	サル足	縦のり	縦のり	ランニング	ランニング	ギャロップ	最後に決める！
	拍	8	8	8	8	8	8	8	8

（ダンス構成シート2）

VTR映像や、モニターのアドバイスから動きを修正していくのは大変だったし、難しかったけれど、見る観点に沿ってたくさん意見を出し合うことができて、自分達の原案に合ったダンスにやと近づくことができて、良かった。（ワークシート3）

構成シートを検討し、より自分達の願いに合う動きに修正することができた姿である。

このF生のグループのように、自分達の願いに合う動きに修正することができたグループは、6グループ中5グループであった。単元終了後に振り返りの自己評価を行ったところ、「自分達のダンス映像や、モニターのアドバイスを基に、「見る観点」に沿ってダンス構成シートを検討したことで、より自分達の願いに合う動きに修正することができましたか」という質問に対して、38人中12人が「よくできた」、25人が「だいたいできた」と回答した。残り1名の生徒については、ダンス学習に対する抵抗感をもっていたが、CDプレイヤーの操作をしたり、練習時に手拍子をしてリズムをとったりするなどの形で、グループの活動に参加するように促してきたところ、モニターとしてアドバイスをすることができるようになった。

これらのことから、自分達のダンスを撮影したVTR映像の視聴や、モニターからのアドバイスを基に、「見る観点」に沿ってダンス構成シートを検討し、より自分達の願いに合う動きに修正する活動を位置付けたことは、身に付けた動きを構成する力を高めるために有効であることが明らかになった。

一方で、ダンス構成シートを検討することに夢中になり、運動量が少ないグループの姿が見られた。このことから、さらに、運動量を十分確保したダンス学習の単元展開のあり方について究明していく必要性が見えてきた。また、「曲を変えてダンスをしたい」という意見も多く出されたことから、教師がつけたいと考えている力と生徒の実態とをよく考えた上で曲を選ぶ必要性が見えてきた。

【成果と課題】

○VTR映像の視聴やモニターからのアドバイスを基に、「見る観点」に沿ってダンス構成シートを検討し、より自分達の願いに合う動きに修正する活動を位置付けたことは、身に付けた動きを構成する力を高めるために有効であった。

△運動量を十分に確保したダンス学習の単元展開の在り方。

△つける力と生徒の実態に合った曲の選び方。

【事例2：体育理論】

(1) 生徒自らが課題意識をもち、自主的に学習内容を追究していく学習過程と教材化の工夫
(3年・「ワンダフル スポーツ！」)

調査活動を取り入れながら自主的に学ぶことができる体育理論の授業にしたいと考え、昨年度は5時間扱いの単元として行った。「意義」という言葉を生徒に分かりやすい「スポーツのもつよさ」という言葉に置き換えたこと、また、生徒が興味・関心をもって追究していくような内容を教師が取り上げ、生徒が作成するポスターと同様の形式にし、「参考ポスター」として提示したことなどの点を工夫した。

【教師が提示した参考ポスターのタイトルと内容】

※()内は解説に示されている小項目

- ◇生涯現役(挑み続ける二人のおじいちゃん)(ア)
：マスタース陸上に魅せられる理由とは何だろうか
- ◇一校一國運動(イ)
：長野オリンピックから世界に広がったもの
- ◇オリンピック参加国数の変化(イ)
：世界地図に色塗りされた参加国数の増加からどのようなことが分かるのだろうか
- ◇TAKE ACTION(ウ)
：中田英寿選手がスポーツを通して伝えたいこと
- ◇国を越えてスポーツを楽しむ(ウ)
：友好訪中団として現地中学生とスポーツ交流を通して感じたことは何か
- ◇EARTH MARATHON(映像あり)(ア、ウ)
：世界一周マラソンを通して得たいものは何なのだろうか
- ◇「障がい者スポーツ」と「スポーツ」に違いはある？ない？(ア、ウ)
：障がいのある方にとってのスポーツとは、どのような意味があるのだろうか

自分が知っているスポーツのもつよさについて考えた後の第2時,右のような形式の7枚の参考ポスターに出会わせた。生徒たちは,興味津々でポスターを見て回り,ポスターから分かったこと,新しく知ったことなどをワークシートに書き留めた。続く第3時に,調査対象が同じような仲間とグループで意見交換し,調査内容や調査方法を決め出す活動を位置付けた。しかし,調べてみたいことがうまく決め出せず,意見交換が進まない個やグループの姿が見られた。これは,教師の参考ポスターを見ることにより,そのポスターが表すスポーツのもつよさを,ある程度理解することができてしまったためであると考ええる。生徒が,「〇〇についてもっと調べてみたい」,「…について調べたら～のよさがわかるのではないか」と思えるように,提示する参考ポスターの枚数,ポスターに付ける見出し,使われた写真や資料の枚数,教師が書き込んだコメントの内容など,参考ポスターの内容や提示の仕方を吟味する必要性が見えてきた。

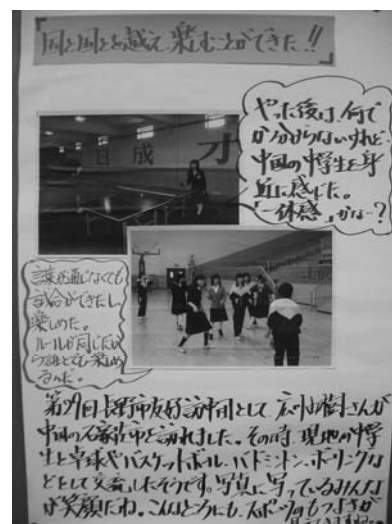


写真3: 教師が提示した参考ポスター

実際の調査活動では,ほとんどの生徒が学校あるいは家庭で,インターネットを使って調べており,調査活動には,大変意欲的に取り組む姿が見られた。このことから,「スポーツのもつよさを調べてポスターにまとめる」という課題意識は,どの生徒にも位置付けていたと言える。しかしながら,一人一人がミニポスターを作る場面では,インターネットに書かれていた記事をそのまま書き写す生徒が多かった。校外に足を運びインタビュー活動を行ってきた生徒にも,同様の姿が見られた。これは,教師が提示した参考ポスターの形式に原因があったからであると考ええる。スポーツのもつよさを,自分が調べたことを基に,文章だけで説明しようとしてしまった姿である。

さらに,グループのポスターを作る場面では,同じような内容について調べた者同士でグループを編成した。そして,個々のミニポスターの内容に共通するテーマを決め出し,そのテーマと自分のミニポスターをキーワードでつなぐという手順でグループのポスターを作成した。ミニポスターが同じような内容であるとはいえ,共通するテーマと個々のミニポスターがどのように関係するのかをとらえること,また,そのつながりを短いキーワードで表すことに難しさを感じている生徒の姿が見られた。

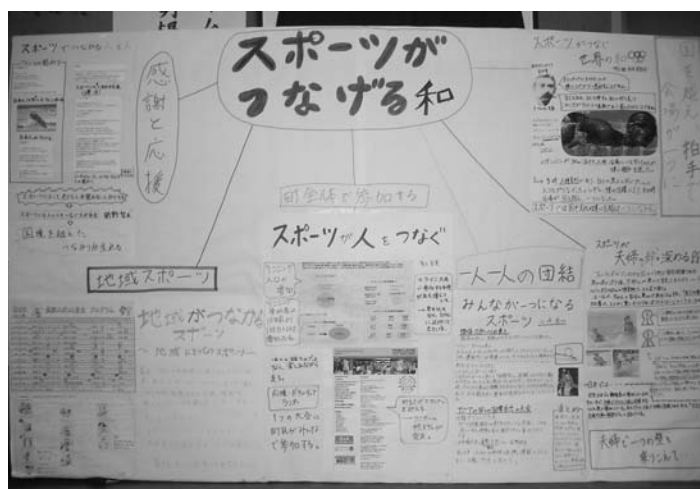


写真4: グループのポスター

「～について調べれば, …のよさがわかるだろう」のような生徒の意識に沿った学習展開にしていくことが必要であることを感じた。また,まとめとなる最終時のポスターセッションにおいても,次のような課題点が見えてきた。

- ・一つ一つのミニポスターを読んで理解するまでに時間がかかった。
- ・六つのブース(6枚のグループのポスター)すべてを回ることができなかった。
- ・説明を読むことで,そのポスターが表すスポーツのもつよさを理解してしまう生徒が多かった。そのため,ポスターについての質問や意見を交わし合う姿が少なかった。

これらの課題点は、ミニポスター、グループのポスターの作成の仕方に大きく影響したと考える。

以上のことから、次のような成果と課題が明らかになった。

【成果と課題】

○個の課題意識に沿い、調査活動を行いながら生徒が自主的に取り組む学習展開。

△教師が提示する参考ポスターの内容や形式と枚数。

△個のミニポスターを基にグループのポスターを作るまでの手順と見通し。

△仲間との意見交換が活発に行われるようなポスターセッションの行い方。

以上の実践を踏まえた上で、本年度、生徒の追究意欲を掻き立てながらも、一人一人が見通しをもって体育理論の学習に取り組めるような単元の導入部分についての追試を行った。そこでは、次の点についての改善を試みた。

- ・単元を4時間の構成に修正した。
- ・第1時に提示する教師の参考ポスターを3枚とする。また、ポスターの内容は、文章では説明せず、1枚の写真とキャッチフレーズ（見出し）とした。
- ・単元の導入で参考ポスターの小テーマの□に入る言葉を全体で考え合うことにより、ア・イ・ウの三つの指導内容を理解する場を設けた。

【教師が提示した参考ポスターのキャッチフレーズ（例）と内容】

- ※（ ）内は解説に示されている小項目 ※ □内は提示の時に伏せておく箇所
- ◇スポーツは永遠だ！（ア）
：マスタース陸上に魅せられる理由とはなんだろう
 - ◇スポーツでつながる（イ）
：世界地図に色塗りされたオリンピック参加国数の増加からどんなことが分かるのだろう
 - ◇スポーツが超える！（ウ）
：人種や性、民族や国家を越えてすることにはどんな意味があるだろう

教師は、最初に1枚の参考ポスターを提示し、どのような人がスポーツを行っている写真であるかを全体で確認した。そして、スポーツのもつよさを表す言葉として、キャッチフレーズの□の中に入る言葉を考えるように促した。生徒は、（スポーツ）は健康、は人生だ、は楽しさなどのように、自分なりの考えに沿って、スポーツのもつよさを短い言葉で表していた。このようにすること

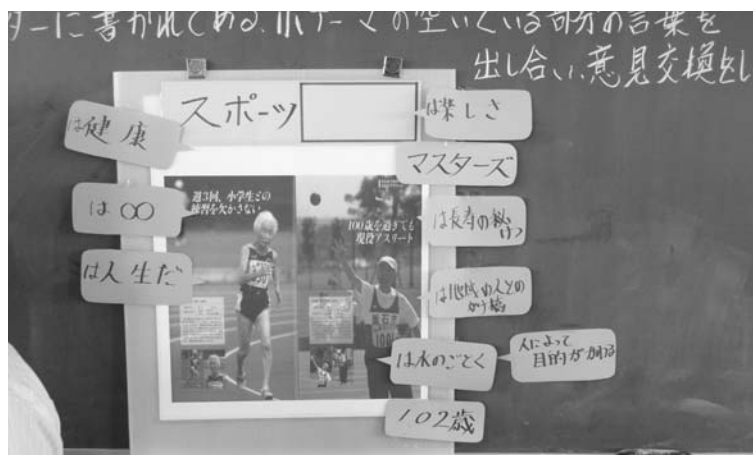


写真5：教師の参考ポスター（小テーマは生徒が考えたもの）

で、生徒は、1枚の写真からわかるスポーツのもつよさを短い言葉（キャッチフレーズ）にまとめポスターを作る、という見通しをもつことができた。また、同じ内容のポスターでも、そのよさを様々な言葉で表現することができることも、実感としてつかんでいた。しかし、参考ポスターの中には、スポーツがもつ問題点を含んでいるものがあり、その点に目を向けて考える生徒の姿も見られた。参考ポスターの内容について、さらに検討していく必要があることがわかった。

【成果と課題】

○スポーツのもつよさをイメージできる参考ポスターの内容（1枚の写真とキャッチフレーズの言葉）。

○単元の導入の段階で、ア・イ・ウの三つの指導内容を理解する場を設けることで、調べてみたい内容がつかめたり、個が作るミニポスターの見通しがもてたりする。

△教師が提示する参考ポスターの内容の吟味。

(2) 仲間との豊かなかかわりの中で互いの考えを深め、理解を広めていく場の設定

(2年・「運動やスポーツへの多様なかかわり方」)

東京マラソンの写真資料を基に、スポーツへのかかわり方にはどのようなものがあるかを考え合う授業を行った。これは、学習指導要領全面实施を前に、2年生を対象に試行的に行った実践である。K生のグループでは、以下のような意見交換が行われた。

〔しばらく資料を見てから〕

K生1：道端で応援している人がたくさんいる。この人たちは、自分では走らないけれど、「応援」という形でかかわっていると言えるね。

S生2：そうだね。「応援」とか「見る」ことも、スポーツにかかわる一つの形だね。

F生3：この人、自転車に乗っているけれど、何をしているのだろうか。

K生4：私もさっきからずっと気になっていたのだけれど、どうしても分からない。

F生5：何か手がかりになるものがあるかもしれない。H君、分かる？

H生6：うーん…。

S生7：〔写真の旗の部分を指差しながら〕この旗に「AED」って書いてあるんじゃないの？

F生8：本当だ。Sさん、よく気が付いたね。ということは…。そうか、もしものときに備えて自転車で走っているのだ。

K生9：人命救助という形でかかわっているということだね。そう考えると、こっちの写真の人の胸にも「医師」って書いてあるから、この人も人命救助を一番の目的として参加しているということか。これは「支える」というかかわりになるね。

F生10：「助ける」と言ってもいいかもね。

H生11：最初はまったく分からなかったけれど、写真を見てみんなで考えたら、いろいろなスポーツへのかかわり方を見つけることができたね。

【考察】K生ははじめ、自分の経験から「応援する」というかかわりについてはすぐに理解することができた(K生1)。しかし、同じグループのF生やH生と共に、それ以外のかかわり方があることについては気付かず(F生3, K生4, F生5, H生6)、困っていた。しかし、「AED」の旗に気付いたS生の発言(S生7)をきっかけに、マラソン大会に自転車で参加している人がいることにつなげて考えることができ(F生8)、最終的に「人命救助」というかかわりがあることに気付くことができた(K生9)。さらに、K生は、胸に付けられた「医師」のゼッケンにも目を向け、同じように「人命救助」として参加している人を見付け、「支える」というかかわりがあることを見いだすことができた(K生9)。これは、一つの資料をグループの友と見合い、互いに気付いたことを出し合いながら意見交換することにより、スポーツへの様々なかかわり方を見いだすことができた姿である。このことから、スポーツへのかかわり方について様々な側面から具体的に考えを深め広めていくことができるようにするために、友とかかわりながら意見交換したことが有効に働いたと考える。しかし、その後の全体発表の場では、それぞれのグループで見いだされたかかわり方が発表されるにとどまり、新しい気付きや発見などの深まりが、あまり見られなかった。

これらのことから、次のような成果と課題が明らかになった。

【成果と課題】

○共通の資料を基に、気付いたことを意見交換し合ったり、疑問に思うことを考え合ったりすることは、互いの考えを深め広めていくことに有効である。

△グループで追究した内容を全体で共有し、深めていくための場の設定。